

# 親鸞聖人750回大遠忌

生きていく、救われていく

石上 智康 (いわがみ ちこう)

宗祖聖人七百五十回大遠忌をお迎えするにあたり、宗門長期振興計画の中、「基本法規の整備」が掲げられています。昨年、具体的な成果として「浄土真宗本願寺派宗制」が、六十年ぶりに改正されました。その前文で「本宗門は・・・あらゆる人々に阿弥陀如来の智慧と慈悲を伝え、もって自他共に心豊かに生きることのできる社会の実現に貢献する（傍点筆者）」と明記されています。

さる四月十五日には、新しい「浄土真宗の教章（私の歩む道）」が發布されました。ご門主様は、「宗風」に変わって特に「宗門」の項を設け「この宗門は・・・同朋教団であり、人々に阿弥陀如来の智慧と慈悲を伝える教団である」とお示しになりました。これは、新「宗制」の前文を念頭に置かれた深い思召しによるものと拝察されます。

宗教法人の公益性が、いま問題になっています。私たちは宗門内だけでなく、「あらゆる人々に」そして「人々に」、阿弥陀さまの智慧と慈悲を伝えることにより、自他共に心豊かに生きることのできる社会の実現に貢献することになったのです。

人々に、阿弥陀さまの眞実をお伝えするのである以上、当然、間違いがあってはなりません。しかし、ただ言いつばなしだけでなく、私たちの生活の中で阿弥陀さまの心を心とした行動への努力が伴わなければ、筋が通らないというものでしょう。

忘れてならないのは、親鸞聖人のお手紙に、佛のちかいを聞きはじめると、「三毒をもすこしづつ好まずして、阿弥陀仏の薬をつねに好みめす身となりておはしましあうて候ふぞかし（『註釈版聖典七三九頁「親鸞聖人御消息二』』（・・・阿弥陀仏の薬をつねに好んでめしあがる身となっていっしやることのでございます）」というご教示が、あることです。

大遠忌をお迎えしようとする今日、念佛者に求められている肝要の一つは、み教えの原点への回帰です。一人ひとりの生活の中で、宗祖の仰せのような「身となっている」のかどうか、いま厳しくとわれているのです。

もう一つ、仏教や浄土真宗を伝えようとしても、基本的な言葉や表現が一般の人々には難解で、通じにくくなっているという問題があります。言葉や日々の行動を通してみ教えが伝わっていくことを思えば、心配な事態といわなければなりません。この点でも、現状の改善に向け、それぞれの場で具体的に精いっぱい努力していくことが強く求められています。

以下の覚え書きが、少しでも正法闡揚しょうぼうせんようの一助になれば、ありがたいと思います。

「降りだして 田植たうえいよいよ にぎやかに」

天てんと 地ちと 水と

その つながりの中で  
人は 生きている

父がいて 母がいて

生せいをうけ

はかり知れないつながり

無量むりょう えんの縁に 支ささえられ

いま ここにいる私

生きていく

自分の器量きりょうに応じて 精せいいっぱい生きていく

生きていく そのままが 生かされている私

愛 それは いのちの発露はつろ

愛 それは 執とらわれ

喜びと悲しみの はじまり

わが子の誕生には ころろ天にのぼり

やわ肌みに 手をそろえて 満ちたりる

恩愛おんない じょうの情 は たちがたく

なきがらに 手をそえて 悲嘆ひたん しずに沈む

花は 美しく咲さいても 自慢じまんしない

いつまでも咲いていたい と欲ばらない

死ぬのはイヤ と欲ばるから

その欲望が打ちくだかれて 悲しみ苦しみとなる

みな 私の責任

すべてのことは 動き

すべてのものも 変化している

無常であること それ自身は

悲しいとも 嬉しいとも 言っていない

それなのに 悲しい嬉しい明け暮れの 私

なにごとくも 不変と思ひ誤り

「こと・ものすべて無常なりと 智慧もて見とおすとき

にこそ 実に苦を遠く離れたり これ清浄にいたる道

なり（法句経）」

生き死にするいのちは 縁起しているいのち

すべてのこと すべてのものは

原因や さまざまな条件 ご縁が互いに関係しあい

「縁って起きている」

すべてのこと すがた かたちは

縁って起きているから 「空」

空とは「縁起<sup>えんぎ</sup>」している ということ

固定したがた かたちは どこにもない

執<sup>ひ</sup>われや悲喜<sup>き</sup>などが まぎれ込む<sup>こ</sup>余地<sup>よち</sup>は ない

得<sup>え</sup>るものがない 失<sup>う</sup>しな うものもない

縁起している 変化している ただそれだけ  
すべて それだけ

気<sup>き</sup>付<sup>づ</sup>こうが 気<sup>き</sup>付<sup>づ</sup>くまいが

真<sup>しん</sup>実<sup>じつ</sup>は 常<sup>つね</sup>に 真<sup>しん</sup>実<sup>じつ</sup>としてある

真<sup>しん</sup>実<sup>じつ</sup>に よび<sup>さ</sup>覚<sup>さ</sup>まされて

撰<sup>お</sup>めとられていく

いつでも どこにあっても 無<sup>む</sup>常<sup>じょう</sup> 縁<sup>えん</sup>起<sup>ぎ</sup> 空

「無<sup>む</sup>上<sup>じょう</sup>仏<sup>ぶつ</sup>と申<sup>もう</sup>すは、かたちもなくまします（親<sup>しん</sup>鸞<sup>らん</sup>聖<sup>せい</sup>人<sup>にん</sup>）」

（『註<sup>しゆ</sup>積<sup>じく</sup>版<sup>ばん</sup>聖<sup>せい</sup>典<sup>てん</sup>』六<sup>ろく</sup>二<sup>に</sup>二<sup>に</sup>頁<sup>げつ</sup>）

最<sup>さい</sup>高<sup>こう</sup>の覚<sup>さく</sup>りは 縁<sup>えん</sup>起<sup>ぎ</sup> 空<sup>くう</sup>ということ

「かたちもましまさぬやう（親<sup>しん</sup>鸞<sup>らん</sup>聖<sup>せい</sup>人<sup>にん</sup>）」に

よび 覚<sup>さく</sup>まされて

撰<sup>お</sup>めとられていく

救<sup>すく</sup>う佛<sup>ほとけ</sup>も 空

救<sup>すく</sup>われるものも 空

救<sup>すく</sup>われて往<sup>い</sup>生<sup>じょう</sup>く浄<sup>じょう</sup>土<sup>ど</sup>も 縁<sup>えん</sup>起<sup>ぎ</sup> 空

いつでも どこにあっても

みな

ほとけ たなごころ  
み佛の掌の上

なんの心配もいらない と聞かせていただき

安心する

なんの心配もいらない と聞かせていただいても

なかなか 安心できない

安心できない そのままでいい と聞かせていただき

安心する

まるまる この世の<sup>よ</sup>実相 <sup>じっそう</sup> 真実のひとりばたらき

凡愚のままで <sup>す</sup>捨てられず

このままで この世の<sup>よ</sup>苦海<sup>くかい</sup>を こえて<sup>い</sup>往生く

し 死に<sup>あ</sup>さまの よし<sup>あ</sup>悪しなども 問題でない

無常 縁起 空であることを <sup>あく</sup>さまたげる悪など

この世の中の どこにも ない

そのままがいい そのままで

そのままこいよの <sup>ごえ</sup>および声

撰めとるぞの

そのま<sup>すく</sup>ま救<sup>じ</sup>うの <sup>ひ</sup>お慈悲<sup>お</sup>の仰せ

きみょうむりょうじゆによらい  
帰命無量寿如来

縁起 空なる さわりのない 無量<sup>いのち</sup>の寿に 帰命する

真実に よび覚まされて

無量寿如来に <sup>まか</sup>したが<sup>まか</sup>い任す

いのちの <sup>き</sup>帰<sup>き</sup>するところ

仰せの通り

いのちを <sup>まか</sup> 任す

はからいの心なく

真実の <sup>しんじん</sup> 信心

なごりおしく 思えども

この世の縁が つきる時

<sup>じた</sup> 自他のかまえや ある無しの

世俗の <sup>せめ</sup> 分別苦から 解き放たれて

執われもなく 何もなく

おのずからなる み手のうち

(宗会議員)

<参考文献>

中村 元『現代語訳大乘仏典 1 般若経典』東京書籍、二〇〇三年

大谷義博『いきいき法語』法蔵館、二〇〇四年

拙著『この世とあの世を結ぶことば』徳間書店、二〇〇五年